

プロローグ

スウェーデンのろう教育は、世界の中でも先進的に手話の導入を果たした。ろう児には第一言語としてスウェーデン手話を、スウェーデン語は第二言語として学習させるというバイリンガル教育を推し進めている。その様子を学ぶため、1999年に2ヶ月間滞在して調査を行った（鳥越・クリスターソン、2003）。調査を終え、しばらくしてスウェーデンの何人かの友人から、ろう教育が変わってきた、大きな変化の渦にいたるとの話をうかがった。再度現地調査を思い立ち、プライスラー教授にメールで相談したとき、今スウェーデンのろう教育は混乱しているので、・・・とあまり賛成してもらえなかった。1つには人工内耳を装用する聴覚障害児の激増、さらに教育改革の嵐があるとのこと。ただ単に手話教育の大先輩として教えるを請うというのではなく、スウェーデンの今の現実、リアリティを学びたい、実は日本のろう教育も大きな変化の渦にあることなどを話すと、では、ぜひスウェーデンの「現実」を見て下さいと快く承諾していただいた。

2005年3月から3ヶ月間、スウェーデンに滞在し、スウェーデンのろう教育が迎えている、この大きな変化、「現実」を、できるだけその場に身を置き、実践の場で見、聞き、考え、感じたことを通して、具体的に記述することを試みた。そしてこの調査を通して、ろう教育が今迎えている、様々な困難な課題を解決する手がかりを得たいと考えた。

はじめに結論めいたことを言うと、スウェーデンのバイリンガルろう教育は決して「崩壊」したわけではない。しっかりと手話がろう学校に根付いており、それに基づいた教育実践が積み重ねられている。先生方もそこに一抹の不安も疑念も抱いていない。スウェーデンを再び訪れ、まだまだ日本が学ぶべきことは多いと感じた。しかし変化も着実に起こりつつあった。前回の調査を行ったときは、ろう者もろう学校の先生も自信に満ちていた。日本の皆さんに我々の実践と成果を伝えて欲しいと随所で言われた。今回は多くの場所で、他のろう学校の様子はどうか、日本の状況はどうかと尋ねられることが多かった。また是非とも今回の調査の報告を我々のわかる形で示して欲しい、こういうときこそ外からの視点が必要かもしれないとも言われた。まだ彼らに分かる形での報告は果たせていないが、本書を、私がスウェーデン調査で学んだこと、考えたこと、感じたことの第一報としたい。

1 スウェーデンのろう教育の大きな変化

「バイリンガルろう教育」の成果をどう評価するか？

1981年、スウェーデン国会はスウェーデン手話が1つの独自の言語であるとし、ろう児の教育に関して、以下のように決議を行った。

「政府のインテグレーション委員会は、重度のろう者は、彼ら自身の間で、そして社会の中でうまくやっていくためにバイリンガルにならなければならない。彼らにとっての二言語とは、視覚的・身振りの言語である手話と彼らを取り巻く社会で使われている言語、スウェーデン語を意味する」

この決議に基づき1983年から導入された「ろう児／難聴児のための特殊学校の新カリキュラム」では、ろう児にとっての手話とスウェーデン語に関して、以下のように語られている。

「手話は、ろう生徒にとって知識を獲得するための主要な手段であり、他者と直接的なコミュニケーションを行うための言語である。・・・スウェーデン語は主として書き言葉の機能を果たす。しかしながらももちろん読話やスピーチもこの学科においては重要な要素である。」

これに基づき、バイリンガルろう教育が全国のろう学校に導入されたのだ。それまでの口話法やトータルコミュニケーションと大きく異なる、この方法が必ずしも順風満帆にスウェーデンの教育現場

に浸透したとは言えないところもある。現職の先生のための研修プログラムが大学に導入され、手話を活用した教材が開発され、ろう学校の教室にろう者が手話教師として派遣され、教員養成のシステムもろう者自身が先生になりやすいように変わった。まさに教室をバイリンガルにする取り組みがなされたのだ。今では手話ができなければろう学校はおろか、ろう学校の先生を養成する大学のプログラムにも入れない。また両親のための手話学習の機会も設けられ、ろう児の手話環境の整備も進んだ。教育実践が積み重ねられ、20年が経過し、今やスウェーデンのろう者やろう学校関係者が「スウェーデンモデル」と誇らしげに胸を張って言えるまで成熟し、定着したプログラムになっている。

ただ、ろう児や学校を取り巻く「現実」の方は大きく変わりつつある。時に混乱も生じているが、その「現実」を否定するのではなく、その「現実」をしっかりと受け止めながら、柔軟で意欲的な取り組みが始まっている。

スウェーデンに到着し、まず手始めに大学の研究室で、インターネットによる情報収集を行った。するとすぐに、出版されたばかりのろう教育に関する分厚い、かつ刺激的な論文に出会った。タイトルは、Literacy and Deaf Education (リテラシーとろう教育)。著者はベグガ＝グプタ・サンギータ (オレビュー大学)、出版年は2004年、出版元は教育発展局 (Myndigheten for Skolutveckling)。政府機関である。政府機関の出版物には珍しく英語で書かれている。早速この論文から取りかかった。この論文を通して今のスウェーデンの大きな変化の一端を知ることができた。

この論文は、内外のろう教育の研究論文、実践報告をレビューし、現在のスウェーデンのバイリンガルろう教育が十分に成果を出せていないこと、それには今の教育実践システムに問題があることを指摘している。当然のことながら、これまでろう教育を推し進めてきた研究者、教育関係者に大きな議論を呼び起こしている。

まずサンギータ氏は、スウェーデンのろう教育が十分に成果を出せていないと主張する根拠として、1998年に全国で導入されたナショナルテストの結果を示している。実はこのテストの結果が、ろう教育関係者に失望と戸惑いをもたらした。彼らが期待したほどには成績がよくなかったのだ。

スウェーデンでは、教育改革の一環として1998年春にナショナルテスト(グレイディングシステム)が導入されている。これは教育の成果を、教育目標との関連でより眼に見える形で提示することをめざしたものであり、基礎学校の生徒は最終学年(9年生)の時にそれぞれの科目ごとにカリキュラムに示されている教育目標に達成したか否かを絶対評価で判定を受ける。ナショナルテストに合格すると、その科目の単位が取得されたと認定される。この評価は、また同時に高校(ギムナジウム)の正規課程への入学資格試験ともなっている。高校の正規課程に入学するためには、少なくともスウェーデン語、数学、英語の3科目(中核科目と言われている)で合格点を得なければならない。毎年教育省からこのテスト結果が公表されているが、例えば2003年の学校基本調査によると基礎学校の全卒業生の89.5%が3科目で合格している。ちなみにこの報告によると基礎学校卒業生のおよそ98%が高校に進学しているが、そのうちおよそ10%は正規課程でない(特別プログラムと書かれていた)ということになる。その前後の年の統計資料を見てもおよそ90%の卒業生が高校の正規課程への入学を許可されていた。

サンギータ氏の論文には、このナショナルテストがスタートした後の2年間のろう学校卒業生の結果が示されている(表1-1、表1-2)。ナショナルテストに合格して高校の正規課程に入学したのはろう学校卒業生のおよそ40%であった。必ずしも高くない。また教科ごとの合格者の割合も報告されているが、たとえばスウェーデン語では生徒の62%しか合格していない。サンギータはこの学業成績が振るわない理由としてスウェーデン語の読み書き能力の低さを挙げ、現在の「スウェーデンモデル」を痛烈に批判している。

表 1-1 ろう学校卒業生の学業成績 (Sangeeta, 2004)

	1998/99	1999/2000
基礎学校の卒業資格を持って高校に入学	24 人 (39%)	24 人 (39%)
基礎学校の卒業資格を持たず高校に入学	37 人 (61%)	38 人 (61%)
計	61 人	62 人

表 1-2 ろう学校 10 年生の主要科目の単位取得の割合(1997/1998) (Sangeeta, 2004)

	スウェーデン語	数学	英語
単位取得	62.0%	57.2%	63.4%
単位未取得	38.0%	42.8%	36.6%

本報告の目的は、ろう教育の指導法に関して議論することではなく、あくまでもスウェーデンのろう教育の今を伝えることである。したがって、サンギータ氏が巻き起こしている議論には深入りしないが、以下簡単に彼女の批判の論点だけ述べておく。

1つとして、これまでのスウェーデンのバイリンガルろう教育は「イデオロギー」に先導されてきた。「スウェーデンモデル」は成功していると主張されるが、必ずしも実証的データに基づいていないとしている。

2つに、では「スウェーデンモデル」のどこに問題があるのかについては、特に幼少期のろう児が、手話のモノリンガルになっており、また教育環境が意識的に音声言語（書き言葉であっても）の導入を遅らせて（排除して）いるとしている。もちろんバイリンガル教育の研究の中で第一言語の役割の重要性が指摘されている事実を、サンギータ氏も認識しているが、かと言って音声言語を排除する理由にはならないと主張している。

3つには、2つの言語、すなわち手話とスウェーデン語の間の橋渡しを十分に実践してこなかった。この橋渡しに関して「スウェーデンモデル」の理論的実践的支柱になっているのが、スヴァルトホルム教授（ストックホルム大学北欧諸語研究所）の論文(Svaltholm, 1980)であるが、これは対照文法論を根拠にしており、第二言語指導論としては時代遅れだと酷評している。

論文を読んでいて、現在のスウェーデンの教育実践に対してあまりに強い口調で語られていることに、私自身も戸惑いを覚えたが、サンギータ氏の議論は、決してバイリンガルろう教育を否定するものではない。国の教育政策が示すように、ろう児がバイリンガルになることが重要であることに疑いがないとしている。ただその道筋として「スウェーデンモデル」に異を唱えているのである。この議論が妥当かどうかについては、ここですぐに判断はできないが、ただ一枚岩のように見られてきた「スウェーデンモデル」が、外からの変化だけでなく、内部から当事者たちによって揺り動かされていることは興味深い。また現実として、スウェーデンのろう児たちが、学業成績に関して苦戦しているという事実も動かしがたい（ナショナルテストの結果に関しては、異なった現場の意見もあることが、後のインタビューから明らかになる、第2章参照）。

人工内耳装用児の激増：ヨテボリでの会議から

スウェーデンのろう教育を大きく揺り動かしている、もう 1 つ要因は、人工内耳装用児の激増という外からの変化である。

スウェーデンだけでなく、世界的にも先進諸国では、一方で手話の導入が拡がり、手話を活用した教育実践が進む中、他方でろう児の人工内耳装用の事例が激増し、時には、相互に激しい論争や不幸な攻撃が巻き起こっている。ただその動きも少しずつ鎮静化しつつあるのだろう。例えば、アメリカ

ろう協会(NAD)の1990年に公表された、人工内耳に対する意見論文では、人工内耳を、ろう社会とろう文化の抹殺をもたらすものとして激しく非難し、また子どもに人工内耳の手術をさせた親を「子どもを虐待している」とまで言い切っている(NAD,1990)。ところが2000年に公表された同団体の人工内耳に対する意見論文では、テクノロジーはろう者に多くの利益をもたらしてきた、人工内耳もそのテクノロジーの1つであるとし、人工内耳に一定の評価を与えている。また子どもに人工内耳を選択することに関しては、あからさまな攻撃でなく、ろう文化や手話に関しても十分な情報の提供が必要であるとする提言の形に変わっている(NAD,2000)。

人工内耳装用児の心理的発達を追いかけている、ストックホルム大学のプライスラー教授によると、スウェーデンでも同様とのことだ。1990年代子どもへの人工内耳の装用が増え始めたとき、医学界と教育界の間で激しい議論の応酬があった。ろう者たちも子どもの人工内耳装用に対して激しく反対し、親たちはその間に立って右往左往し、戸惑っていたとのことだ。2000年に入り、この混乱が大分落ち着きを持ってきた。「現実」として受け止められつつあるのであろう。ろう学校にも人工内耳を装用する生徒が増える中、教師たちも教育現場での対応を模索しつつある。

プライスラー教授によると、スウェーデンでは現在、新たに生まれるろう児のおよそ90%が人工内耳装用の手術を受けているとのことだ。手話による教育がこれだけ普及し、その成果に自信を持っているスウェーデン(他の北欧諸国も同様)で、なぜこれだけ人工内耳が増えているのかと行く先々で聞いてみた。皆一様に首をかしげると共に、逆に科学技術の進んでいる日本でどうしてそれほど増えていないのかと聞かれた。私も答えを持ち合わせていない。お互いに首をかしげるばかりであった。

スウェーデンの人工内耳装用児たちを取り巻く「現実」を知りたくて、スウェーデン第二の大都市、ヨテボリに飛んだ。丁度ここで人工内耳装用児を持つ親の会主催のシンポジウムが開かれていたのだ。

人工内耳装用児を持つ親の会(スウェーデン語でBarnplantornaという名称)は、1995年にここヨテボリで結成された。最初のメンバーは人工内耳装用児を持つ4家族であった。会のパンフレットによると、「会の目的は、親の立場から人工内耳についての情報を発信すること。ろう児が人工内耳を装用すると、ある意味で新しい状況が子どもや家族に生まれ、新しい問題が浮かび上がってくる。我々の子どもたちは、以前とは異なるニーズや条件を持つことになる。子どもたちの利益を最善の状態で守るために、強い利益団体が必要とされた。」とその使命を宣言している。現在はろう教育に関して非常に大きな影響力を持つ団体にまで成長している(ろう教育に関わる様々な委員会にろう児の親の会(DBH)とともにこの会も名を連ねている)。

まず午前中に小規模のサテライト・シンポジウムが開かれて、人工内耳に関わる技術的、医学的な情報交換が行われていた。参加人数は30人くらいだろうか?医学関係者、人工内耳を製造している企業の担当者、教師、親たちが集まっていた。まず医学関係者からは、従来は手術が困難なため適用の対象外とされてきた事例に対する装用、両耳の装用、1歳以下の早期の装用、重複障害児に対する装用(例えば盲ろう児)などについて報告があった。人工内耳を開発・製造している企業から新製品についての報告もあった。興味深い報告としては、聴覚障害児のおよそ30%に軽度の発達障害があり、その場合、装用の効果がなかなか得られにくいとの話。軽度発達障害を併せもつ聴覚障害児への支援に関しては、この後の私の調査でも大きなトピックのひとつになる。蛇足ながらこのサテライト・シンポジウムで手話の話は一言も出てこなかった。

このシンポジウムにスウェーデンの人たちはどのような思いで参加しているのだろうか。またスウェーデンのろう教育の変化をどのように認識しているのだろうか。コーヒープレイクで何人かの人たちと情報交換をした。

ルンド(スウェーデン南部の都市)からやっていた特殊教育専門家(specialpedagog)の女性。彼女の役割は、聴覚障害が発見されたあと、初めて家族と出会う教育の専門家だ。主に家庭訪問をしな

がら、聴覚障害に関わる情報提供したり、また一緒にろう児と遊んで、ろう児との関わり方を親に見てもらったりする。家庭訪問は月に2回程度。家庭の事情にもよるが、ろう学校に入る年齢になるくらいまで家庭訪問を続けるとのこと。ここ数年のろう教育の変化をどう感じているか？とたずねると、確かに大きく変わってきたと感じているとのこと。特に仕事の内容が変わってきた。もちろん家族にろう者や手話についての情報も提供するが、人工内耳についての情報も提供しなくてはならない。その知識を得るためにこのシンポジウムに参加したとのことだ。

ヨテボリのろう児のための幼稚園の教師。彼女もろう教育の大きな変化を感じているとのこと。具体的には？と聞くと、ろう児のための幼稚園に通う生徒の数が減ってきたとのこと。今3歳から5歳まであわせて全部で17人いるが、ここ数年減少傾向だとのこと。人工内耳装用児も5人いるが、親たちは一般の幼稚園に通わせたがる。減少傾向が進むと集団の形成が難しくなると危機感をもっているとのこと。

スウェーデンの北部で働いているスピーチセラピストとも話ができた。最近のろう教育の変化について、彼女も戸惑っているとのこと。彼女は病院で働いているが、これまでろう・難聴児とはほとんど出会わなかった。病院では主に吃音や口蓋裂などの言語障害の子どもの対応をしてきたが、最近、人工内耳装用児の外来が増えてきた。彼女自身も今3人受けもっているが、見よう見まねでやっているとのこと。最近のろう教育の大きな変化についても実感しているが、医療の場にいる身なので、教育に対して具体的にどうこういう意見は持っていないとのこと。手話はできない。同じ地域から来ている特殊教育専門家も話しに加わってくれた。彼女もろう教育の大きな変化を実感しているが、とにかく現場では手話も使っているとのこと。北部では、人工内耳装用児はろう学校に行くケースと地域の学校に行くケースがある。地域の学校に行く場合には何らかのサポートがあるのかと質問すると、わからないという。医療と学校がまだ十分に連携ができていないのだという。

ろう者もこのシンポジウムに参加していた。オレブロ大学の学生でろう教育を専攻している。人工内耳の問題に関心があり参加しているとのことだった。人工内耳を頭から否定するのではなく、とにかく何事も学ぶ必要があると語っていたのが印象的だった。

昼からのシンポジウムは、参加者が200人くらいだったろうか。教育関係者、医療関係者、親、当事者などの参加があり、会場のホールがいっぱいになるほど盛会であった。プログラムは、まず基調講演から。講演者は、まずカナダの研究者ジュディー・シムサー氏。彼女は、オーディオ・バーバル(Audio-Verbal)療法の推進を担っている団体のコンサルタントで、人工内耳装用児の療育プログラムも担当している。

内容を要約するとこうだ。とにかく人工内耳装用児には聴覚の活用が必要、そして音声言語の豊富な環境が必要。人工内耳が生まれ、ろう教育が始まって以来、もっとも聴覚にアクセスできるようになった。読み書きのベースには音声言語がある。音声言語ができないと学校の成績が上がらない。それに音声言語ができないと将来の選択肢が狭くなる。選択できることが幸せにつながる。また手話など視覚に頼ると聴覚を使わなくなる。手話を使っている限り、聞こえていても、そこ(音)に意味を付与させない。ろう者のように振舞ってしまうとのこと。

たまたま会に参加していた成人ろう者が手を挙げ、手話通訳を介して囁み付いた。「それでは手話を犠牲にしているのでは。手話はろう者の言語で、ここスウェーデンでは有効な言語として活用されている・・・」と。会場内に緊張の走った瞬間だった。それに対して、彼女は「手話には書き言葉がない。書き言葉には音声言語が必要。読むことは非常に聴覚的な行為。聴覚的な脳(auditory brain)を作る必要がある！」との返答。何度かやりとりがあったが、もちろん議論はかみ合わない。

シムサー氏は人工内耳装用児親の会の地方支部でもワークショップや研修会をたびたび開いている。会報にもその様子が記事として紹介されていた。手話を否定する言語指導論が親の間でも広がりつつ

あることは事実のようだ。

2人目の講師は、英国の聴覚財団（Ear Foundation）のアーチボルト氏。彼女も、慎重な語り口であったが、科学的な資料も交えながら、人工内耳装用児にとって聴覚を活用することの重要性を説いていた。彼女の調査によると、現実には、人工内耳を早期に装用すると、たとえ子どもの周りに手話の環境があっても、主要なコミュニケーション手段が手話から音声言語へと自然に（かなりの割合で）移行している。ただ人工内耳を装用しても必ずしも効果が得られないケースもあるとのこと。それは聴覚の障害以外に軽度の発達障害を持っている可能性のあるケース。人工内耳を装用して初めてその障害に気づくということもあるという。そのような子どもたちも人工内耳を装用して、聴力を回復させることに意味がある、その後はそれなりの（例えば学習障害の）サポートがもちろん必要である、ただ、それはもう聴覚障害に関わる問題とは異なるとも言う。

アーチボルト氏の講演の最後に印象に残った発言があった。それは、「まず私が講演で言っていないことを確認して欲しい。つまり、『すべてのろう児は手話をすべき』。それと『すべてのろう児はオーラルであるべき』。いずれも間違い」。またこうも言っている。「変化には時間がかかる。人工内耳を装用しても効果が出るのはゆっくりで、時には何年もかかる。その間も、子どもはしっかりと成長しつづけなければならない。そのためにはサポートが必要。手話も有効なサポートになるだろう。でもその間もちろん音声言語の入力も必要。それは楽しく、かつ適切な状況で行うことが必要。」

アーチボルト氏が講演の中で導き出した結論は、今のスウェーデンのろう教育の現実を理解する上に有用だろう。彼女は、人工内耳を装用することは耳から音声言語を獲得できる可能性を飛躍的に増大させる、特に、早期に装用すると、手話から音声言語へのスイッチが自然に行われるとしている。ただそれには時間がかかる、人工内耳装用後すぐに効果が出るのでない、個人差はあるが、5年や10年のスパンで考える必要がある、その間もフルに子どもたちは発達しつづける必要があるとも述べている。その間は、聴覚の活用や音声言語の発達だけに着目すればいいわけではない。子どもたちが全面的な発達をするためにはサポートが必要だろう。それには手話が必要だ。

スウェーデン手話を活用したバイリンガル状況は子どもたちの全面的な発達に有効であることはこれまでも報告されている。またアーチボルト氏は、彼女たちの調査結果を報告し、人工内耳装用前のコミュニケーションの質は人工内耳装用後の効果を予想するということがあった。すなわち人工内耳装用前の段階で周りとうまくコミュニケーションできる子どもたちは、人工内耳装用の効果も大きいというのである。そうであればなおさら手話の環境は否定できない。また手話から音声言語へ移行してしまうのは、周りの音声言語への圧力が高いからではないか？手話に関しても十分な言語環境があれば、まさに手話と音声言語のバイリンガルになる可能性をはらんでいるかもしれない。いろいろと理解が進む中で、また新たな疑問も沸き起こってきた。

アーチボルト氏は人工内耳を取り巻くいくつかの現実を提示している。人工内耳を装用すると手話の環境があっても音声言語に移行してしまう（手話を捨ててしまう）という現実。またおよそ30%のろう児は人工内耳装用の効果があまりあがらないという。そういうろう児の存在も1つの現実。前述のサンギータ氏によれば、スウェーデンのバイリンガルろう教育は、1つの現実（ろう児やろう成人は手話を使う）のみを見て、それをイデオロギーとして推し進めてきた。それは従来のオーラル・イデオロギー（口話主義）と対抗するためには必要だったのかもしれない。そもそも教育はイデオロギー（教育理念とも言えよう）が不可欠だ。ただイデオロギーに導かれつつも、常に現実と折り合いをつけながらの教育実践でないと、その営みが硬直化してしまう。スウェーデンは今その現実を受け入れつつ、大きく変わろうとしている。様々な現実を前に、それらをどう受け止め、どうバランスを取っていくかが、これから重要なのだろう。こんなことをこのシンポジウムに参加しながら考えた。

聴覚活用の可能性を持つ人工内耳装用児にとって、手話と聴覚の活用をどのようにバランスをとっ

て教育環境を整備するのか。まさにスウェーデンのろう教育（難聴児教育も含め）が今直面している大きな課題である。この課題に学校はどう取り組んでいるのだろうか。ろう学校の現地調査を始めることになる。

（つづく）